

歴史で知る

遺跡を語る

松川村の鼠穴地区には、松川村指定文化財桜沢遺跡があります。この遺跡は昭和三十年の夏、国学院大学によって発掘調査が行われました。さらに昭和四十二年にはこの遺跡の周辺が開田されることになり再び発掘調査が行われ、ここには大集落が発見されるのではな

いかと期待されています。発掘調査の結果、堅穴住居跡らしいものや「カマ場」と見られる炭の土層、土器などが数点発見されましたが、期待された「大集落住居」と判断されるものはなく、現在では「小規模団地」ではないかとの見方が強いようです。



桜沢遺跡の外観

われています。桜沢遺跡は調査によって堅穴住居跡と若干の遺物が発見され、住居跡は地表より一・五メートルの地下にあり、長径四・一メートル、短径三・六メートルの円形をしていて、見つかった状況から過去に2回火事があったことがわかり、

柱穴は40個に及びその配列が不規則であり、建て直しをした住居であることがわかっていきます。遺跡の中からは約600点に及ぶ土器片と1個の土器をはじめ、石斧、石匙、石やり、石錐、石皿などの石器類などが出土しました。堅穴住居というのは掘り立て柱なのでやがて腐っていき、多くの場合、当時の人たちはその家を捨てて住む場所を変えていたようです。



松川村教育委員会 西澤教育長
桜沢遺跡は現在桜沢公園として整備され気楽に訪れることができます。取材に応じてくれた



松川村内にある満蒙開拓団の記念碑

今から約80年前、日本は支配下に置いた中国(満州)を支配するために関東軍を送り出し、その関東軍を補助するため、満蒙開拓青少年義勇軍が送り出された。

少年たちの戦い

1931年の満州事変をきっかけに満州を手に入れた日本は1938年、満州国を統治

するために関東軍や満州移民の不足を感じ、青少年義勇軍を送り出した。青少年義勇軍は15歳、19歳の少年が主で長野県は全国の中でも一番多く、4768人も少年たちを送り出したという。そのなかの斎藤中隊という隊にはこの松川村からも3人が

出ている。青少年義勇軍の少年たちは「満蒙開拓に行くのはお国のため、そして将来は20町歩の地主になれる」と小学校の先生にすすめられ、自分の意思によって加わる人もいたのだが、

実際それは関東軍や為政者によって仕組まれた青少年たちを取り込むものだった。茨城県の内原訓練所や現地で厳しい訓練を受けた少年たちの多くはソ連国境地帯に入植させられ、満州国の防衛・治安部

隊として送り出され、多くの命を失ったのである。それに、太平洋戦争中日本は食糧が少なく、栄養失調で亡くなった少年義勇軍総数8万6530人中死者約2万4000人。国のために満州へ渡った少年たちのおよそ4人に1人はその地で亡くなってしまったのである。



取材を受けてくださった伊東さん

取材に協力してくださった伊東さんは当時15歳にもなっていないが、ため送り出されるのを免れることができ、後に教師になった。「たくさんの生徒を騙して送り出した先生がそのことを反省せずに

重さも大切にしたい。私たちが戦争の裏側になってしまいがちなこのような話を胸に刻み、もう一度と多くの大切な命を争いで失わぬよう、これからも語り継ぐと同時に、簡単に騙されないという慎

伊藤さんに教えていただいた少年義勇隊の資料



『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』(大月書店)



『長野県満州開拓史』伊藤さんが編集したもの



『興安の友』(非売品) 元満蒙開拓青少年義勇軍 斎藤斎藤中隊回顧録



NHK BS11 特集 満蒙開拓 青少年義勇隊

知らぬ人もいるという。私たちが戦争の裏側になってしまいがちなこのような話を胸に刻み、もう一度と多くの大切な命を争いで失わぬよう、これからも語り継ぐと同時に、簡単に騙されないという慎

この開拓によって、今松川に住んでいるのである。敗戦直後、旧ソ連の侵攻や関東軍の撤退による混乱のなか、中国に留まることを余儀なくされたいわゆる中国残留孤児の人たちも敗戦から数十年後によりやく日本に帰ってくるのができたのだが、まだ残っている自分の中に日本人の血が流れていると知らない人もいるという。

「少年義勇軍は1938年から敗戦までの7年間送り続けられた。そして最後の青少年義勇軍の中の渡辺中隊は帰国後、松川村の西原に入り、林の木を切り田んぼをつくった。

「もういい」と語った。青少年義勇軍は1938年から敗戦までの7年間送り続けられた。そして最後の青少年義勇軍の中の渡辺中隊は帰国後、松川村の西原に入り、林の木を切り田んぼをつくった。